

白金葎

6月号



平成29年6月発行

第76号

白金葺定例会句会案内

七月二十一日(金) 正午〜三時第三兼題…森林浴、青林檎
八月の句会は休み

九月二十二日(第四金) 正午〜三時第三兼題…美術の秋、秋鮭

兼題句参考句(七月二十一日分 森林浴、青林檎)

彫刻の森林浴の聖者・裸婦

森林浴風ここからは檜山

強風のパンチをかわず青りんご

言葉尻ていねいに拭き青林檎

青林檎旅情慰むべくもなく

青林檎置いて卓布の騎士隠る

頬杖ながし青林檎ひとつ置き

ここそこに地の神木の神森林浴

森林浴かすかに光る魚の音も

富士樹海森林浴の深息す

森林浴互みに心透けて見え

森林浴垂れ枝がふさぐ道一つ

沢音の絶えぬ森林浴の径

お岩木の日照雨を弾く青りんご

三才児すでに悪知恵青林檎

高空に照り合ふ岳や青林檎

月例会会報(17/6/16 9名欠4 翡翠、黒鯛)

飯田孝三

竹馬の遠き訃を聞く青隙田

暮鳴いて松葉杖まだ覚つかない

老婆とほうたるを見る小屋圍

ちぬ料づり一酌句仇恋仇

翡翠の一輝走れり權の先

増田陽一

下総は川波緩し梅雨鯰

草丈や川は見えねど夏ひばり

肩甲骨恥骨溽暑のジャコメツテイ

黒鯛釣るや行者ケ窟の波の音

翡翠の最短距離を煌かす

光成高志

翡翠の停止飛行を見とめけり

森林浴御神木切株も見る

倉本岬

山中螢火

長内博

阿部禮子

深見けん二

能村研三

加藤知世子

高橋洋子

金子兜太

浅羽緑子

平畑静塔

田中吉子

山田節子

高澤良一

糸山由紀子

長沼富久子

場外市場大中小の黒鯛並べ
横たはる黒鯛の鱗の黒光り
白鳥に五つの子あり青田中

光
みち

釣宿に箸乾きをりちぬの汁
葎切の双眼鏡に喉赤し
富士塚のてっぺんに風薄暑かな
姉送る施設半夏生草花穂立つ

木曾川に沿うて街道桐の花

浅野正美

白き葦国有林といふところ

トロツコの屋根吹き抜ける青葉風

尾道のおばさん黒鯛を売りに来る

翡翠の一閃富士の真下なり

吉羽多美子

車窓開け老鶯の声風に乗り
見張小屋翡翠を待つカメラマン
梯子のり色づく枇杷を選び採る

蝙蝠や始めて住みし一軒屋

梅雨じめりまづは厨を拭きつくし

武者昭七

黒鯛の洗ひを宿に波音と

翡翠の瑠璃に思はず足を止む

梅雨の蝶父母の墓域をひと巡り

倉田紀子

半切に酢飯を扇ぐ梅雨曇り

さるすべり咲いてひと日の暮れなづむ
水潜るかわせみ征矢の如くなり
征矢の如跳ぶ鳥のあり夏の川
隅田川川面揺り上げ三社祭
病床の三社祭の遠音かな

翡翠は総身槍に漁すまじれり

翡翠の猛き嘴可憐な目

川釣りや翡翠は彼方われは此処
磯暮れて灯台を背に黒鯛を釣る
漁り火や間近き岩場に黒鯛潜む

尾鰭まだ振りをり黒鯛の活き造り

陵の崖に翡翠巢を造る

一匹となりし目高のみごもれり

みなづきの利根のさざなみ細かけれ

鱧の糶終へて魚河岸移転論

かわせみのブルーが好きで見送りぬ

田一枚植えて出て行くトラクター

外厠乾いてひすけて柿若葉

外厠嘆きの壁は葭簀張り

磯目健二

すかんぼやどうでもいい事がある

仲本興正

翡翠の残像ひとつ遺りけり

破顔一笑黒鯛竿を撓めけり

新型の水鉄砲もパパのもの

待ち時間を癒す境内額の花

日常の僧の声して朝曇

田宮敦子

立葵塀の上から猫が呼ぶ

カメラマン鶴鴿は来るきつと来る

叔父釣りし黒鯛捌く母の背せな

豆腐屋へ社会見学初夏の風

石段や蟻一列に進みをり

武者昭七（75号分）

杖をひき木漏れ日の道に歩み入る

里桜九品の仏笑みて坐ます

九品仏笑み給ふ庭の里桜

観桜や戻る坂道女坂

卓袱台の湯飲み二つに新茶注ぐ

一句鑑賞

光成高志

陵の崖に翡翠巢を造る

宏之助

誓子先生の真似をして鑑賞するところなる。翡翠はいいところに巢を造りました。あの美しい翡翠も御陵を守っているのですね。

竹馬の遠き訃を聞く青隙田

孝三

竹馬やいろはにほへとちりぢりに（久保田万太郎）の句があるから、これはタケウマノトオキフヲキクアオスキタと読めばいい。厳密には竹馬と竹馬の友とは違うのだから、チクバノ トオキフヲキクというふうに一拍到トモノと口籠をして読むのもいいと思う。下五の青隙田は、以前私が提唱して作者が支持してくれた季語だ。植田から青田になるまでの青の隙がある田圃のことで、小学時代に駅のホームからよく眺めたという述懐があった。きっとそういう思い出のある竹馬の友の訃報を風の便りに聞いた感慨を青隙田に仮託したのであろうと思います。青隙田には夏の雲が大きく映っていたに違いない。

病床の三社祭の遠音かな

昭七

入院したベッドにて聞こえてくる遠き音は浅草三社祭の音だと感動している句。確と聞こえなくても過去の覚えを引き出して心耳に聞いているともとれる。切字の効果である。五月第三日曜日を最終日とする三社祭。本例会は第三金曜日、その初日だ。

尾道のおばさん黒鯛を売りに来る

みち

今はスーパーマーケットにて求められるが（もともとちぬはめつたにないが）尾道の行商のおばさんがリヤカーに乗って売りに来ていたという回想の句。尾道という地名の醸す風土を裏に持つ豊かさが私にも懐かしい。今は高橋源太郎さんが文芸で活躍している。

梅雨じめりまづは厨を拭きつくし

多美子

長い入院生活の時の思い出として、病室を掃除に来てくれるおばさんがいた。テーブルから引き出しスタンド何から何までさつさと素早く拭き尽して出て行かれた。掃除とは拭き尽すことだと初めて知った。梅雨湿りの頃は先ずは台所を拭き尽して、次に居間とか寝室に移る。その後の爽快な気分。季語が不動かどうかとか不問にしてこの微妙な季感を味わう。

一句鑑賞

武者昭七

木曾川に沿うて街道桐の花

みち

トロツコの屋根吹き抜ける青葉風

〃

木曾川の流域は長くしたがってそれに沿う街道も長い。それがいつせいに背の高い紫の花に覆い尽くされる紫の帯だ。そんな情景が目に見えぬ。それは実景よりも幻想の風景だ。美しい山河に寄せる讃歌である。和歌山牧水が喜びそうな句だ。二句目、頭上を吹きすざる「青葉風」がいかにさわやかで心地いい。心よき青葉の風や旅姿（子規）

みなづきの利根のさざなみ細かけれ

宏之助

青葉風に利根のみなもがかすかな波を立てる。キラキラとした可愛い波だ。さざ波である。それがみなづきの陽光を弾いてまぶしい。周囲にそそく作者のこまやかなまなざしが感じ取れる。かな書もきらめく波をうつして効果的。「さざ波」は古くは「ささなみ」と静穏であったという（岩波古語辞典）。

ちぬ料まり一酌句仇恋仇

孝三

暮鳴いて松葉杖まだ覚つかぬ

〃

一句目、黒鯛をさかんに酌み交わす句仇はかつての恋仇。あのひと今頃どうしているやら。それを言わぬのが友情というもの。「昨日の敵は今日の友。」二句目、「暮鳴いて」は時間と季節のうつりゆき。季節はうつり暮蛙鳴く頃ともなつたけれどいまだに不自由な松葉杖づかい。いらだちと自嘲がかさなる。作者の実感だ

ろう。早い回復を祈ります。

カメラマン鶴鴿は来るきつと来る

敦子

溪流にカメラを据えて鶴鴿のとびきりきたり飛び去るのを狙うカメラマンとは作者自身か囁目の他人か。いずれにせよ作者はいらだちをおさえきれずに何度も何度もくちさむ。きつと来るのだ。「きつと来るだろう」なんて呑気にかまえてなんかいられるものか。絶対きつと来るのだ。その迫力が口調にほとばしでているのが面白い。（鶴鴿ではなく翡翠でしょう。編集子）

一句鑑賞

磯目健二

尾鰭まだ振りをり黒鯛の活き造り

宏之助

我々は魚を食うことにいつこう生類憐れみの情を覚えないが、本来は鬼城や楸邨が擬人化した哀憐句で小動物に寄せた心情が少しあつて然るべきかも知れない。だが本句はそんな感傷など吹き飛ばして、ただ舌鼓打たんと組板上に期待する食欲先行の写生句である。季節の潮に乗ってくる初鰹とはちがつて年中の磯魚だが、黒鯛の活き作りは青葉のころ黒潮で来る初鰹と同じく初夏にふさわしい新鮮な季節の味である。

水潜るかわせみ征矢の如くなり

昭七

征矢の如跳ぶ鳥のあり夏の川

〃

句会でもいわれたが翡翠は難しい題材。矢のような

敏捷さや端麗な姿などにイメージがステレオタイプ化してそれを打破して新味を出すのが困難だ。本句はその固定観念にそのまま乗ってあえて翡翠を詠んだ。征矢なる古語に多少の新味はあるが、旧態依然なることはどちらも変わらない。しかし眼前に特異な鳥の姿がありありと浮かぶから不思議である。そこに私は共同観念の間の文藝としての俳句の面白さを感じる。無技巧の勝利といえるかも。「跳ぶ」は「飛ぶ」か。

外廁嘆きの壁は葎簀張り

啓泰

嘆きの壁といえは有名なエルサレムのユダヤの聖地が思い浮かぶ。神殿遺跡の石壁に教徒が頭を寄せ嘆き祈る風景は神聖さに溢れる。その敬虔なユダヤ教徒として生理の汚辱からは免れ得ない生身の人間である。当然に廁が必要だが、目に入ってきたのは葎簀張りの粗末な小屋だった。石壁の聖と葎簀の俗の取り合わせの面白さ。とまれユダヤの聖地とは全く無縁のたとえば海小屋や催しの外便所かも知れない。しかし屈んで真向かう外廁嘆きの壁は葎簀張りの壁面に尿しつつ嘆く人間図を思い描くのはやや無理のようである。ガリラヤ湖から死海へと国境を流れるヨルダン川には葎も生えているはずなので、ユダヤ聖地での属目句としたい。

黒鯛の洗ひを宿に波音と

多美子

投宿の旅館は波音が間近な海辺。黒鯛の棲んだ海の

音を耳にしつつ新鮮な洗いの美味を堪能する。夏の一夜、湯上がりの浴衣姿でくつろぐ風情が伝わってくる。翡翠の一閃富士の真下なり

みち

一読して北斎描く風景画のようなシーンが脳裏に浮かぶ。富士川かと思える大河の川面に突入する小鳥の一瞬を悠大な富士山を借景にして描きとめた手腕は素晴らしい。悠遠の中の瞬間に視線は集中しているが、陶淵明の「菊を採る東籬の下悠然南山を見る」に通じる大きな構図と自然賛美が底にある。

翡翠の残像ひとつ遺りけり

興正

敏捷な翡翠の動きの一齣だけが視覚の記憶として残った。確かに見たはずだがと呆然と思い返す様子が窺われて面白い。「遺る」は「残る」が正しいと思われるが、残像に付きすぎるとの配慮からの苦心の表記か。

竹馬の遠き訃を聞く青隙田

孝三

初夏の田園美である青田原も減反政策やほかの理由で空しく休耕田になりポツンと隙間ができています。竹馬の友の死もいわば人生に空いた隙間であり喪失である。万太郎の句「竹馬やいろはにはほへとちりぢりに」にある生の流転に寄せる深い感懐をこの句にも私は感じる。

草文や川は見えねど夏ひばり

陽一

雲雀鳴く青空のもと夏の河川敷にはさまざまなイネ

科の草や猫柳などの低木が茫々と繁茂する。丈高い葎や萩・茅・芒などに遮られて川は視界に無いが、ヨシキリの鳴き声も混じって聞こえてきたりして、草原の向こうに川の流れはありありと実感できるのである。

一句鑑賞（五月号分）

松村幸一

有明の湧き水汲んで走りの茶

健二

舟戸の森という前書きがあつた。舟戸といえは白樺派文学村として今に伝えられる手賀沼の地つづき。いろいろ変容を遂げたとはいえ、天然地中の水はなお湧き継いでいるのであろう。その有明の水を汲んで走りの茶にしようという作者の土地への心ばへがうれしい。それはたとえば俳句の季題という、ともすれば途絶えがち濁りがちな湧き水の源の澄を絶やすまいとする心ばへにもつながっているようか。

牡丹や風出てかぜのなき如し

孝三

一幅の画中の牡丹のように、そよりともしなかつたが、ふつと風が出てゆらぎ出した。でも悠揚迫らぬそのゆらぎ方は、風に誘われたというより、自らの意思のようでもある。やがて自らの意思で、動かぬ画中の牡丹に戻る。花の王者の不思議な静と動の息づかいを、少しく抽象化して把握した。

雛罌粟コクリコやこゑのかぎりを迷猫

孝三

コクリコとフランス読みのルビをふつた雛罌粟の例句をまだ見たことがない。なんでコクリコなのであるうか。でも読み手はいやでも与謝野晶子の「ああ皐月 仏蘭西の野は火の色す君も雛罌粟コクリコ われも雛罌粟」を記憶の中から呼び戻さざるを得ない。あの歌の元歌は「若ければふらんすに来て心酔ふ野辺の雛罌粟街の雛罌粟」だった。歌集にする段階で君もわれもと昇華させ、フランスの野を恋の色に染めて絶唱にした。そののち鉄幹からいかに裏切られても、いかに恋の修羅や地獄を見尽くしても、スタートラインの「みだれ髪」で絶対化した恋の演出を仁王立ちになって演出しつつ、見事に一生を全うした。後年の晶子の作に「ありとある悲しみごとの味あぢはひの皆見ゆるかなわがすなる恋」という感動的な一首がある。ぼくは一句の「こゑのかぎりを迷猫」を、のたうつ晶子に擬したのだらうか、と勘ぐるほどの深読みはしたくない。おそらく作者はその寓意はないと思うが、なまじつかコクリコのルビがあるがためについてまどわかされて、ここまできしゃべりをせざるを得ないことになった。

夜盗蛾の昼は隠れて海の音

陽一

ヨトウガは開帳すると4.5・5cmあるという。句の通り昼間はかくれて、夜になって畑の野菜を荒し回る。

夜を待機しながら身近な海のとどろきに耳をすませて
いる不逞な蛾の息遣いも聞きとれるようではないか。

あるいはヨトウという擬人化された言葉自体に誘われ
た作者の白昼夢であろうか。ぼくはこの句を見た時夜
盗蛾を知らないため、室内の壁にでも止まっている夜
の蛾一般を勝手に想像してしまった。

ひなげしや今もそのまま子供部屋

多美子

長く子供のいたその部屋には、そこで暮らした日の
思い出が今もそっくり詰まっている。子供は嫁いでい
ったのか、今も倅せか。いろいろ多様な読み手の想像
にまかせたまま、そとにゆらぐひなげしの姿が一層思
いを増幅させる。

一句鑑賞（五月号分）

増田陽一

新茶古茶知らぬ戦争ありにけり

幸一

新茶の候、そろそろ溽暑も始まり物憂さの時期でも
ある。新茶また古茶、これは平安な日常を繰り返す家
庭生活のなりゆきであるけれど、その間にもこの地球
にはあまり知らされぬ局地的な争いが絶えず起こって
いる。部族抗争。宗教の違い。テロリズム。局地的で
あっても当事者の死傷は世界大戦と変りはない。新茶
古茶の味わいに過ぎゆく平穏な日常があつて、ふと知
られざる戦禍のことを想う。

放置田に呆け茅花の風遊び

高志

茅萱の生え放題になつている休耕田。ツバナは呆け
て白々と風に吹かれている。荒涼とした風景だけれど
「風遊び」と名づけたのは創見で、趣深い光景と見え
るのである。

雛髻栗ヨクリやこゑのかぎりを迷猫

孝三

フランス語でコクリコというのは雄雉の鶏冠の色に
たとえたらしい。晶子の名歌を待つまでもなく、一旦
繁殖すればいちめんの花となる髻栗の群落。勿論猫に
とっては迷路に嵌つたようであろう。出てこられない
子猫の啼き声。音韻に敏感なこの作者らしく、コ音の
繰り返しがリズムミカルによく響いている。

放たれて犬嗅ぎ回る首蓆

みち

利根川の土堤のイメージなどが浮ぶ。解放された途
端に草を嗅ぎ回る犬の習性が的確に言いとめられる。
ひとには窺い知れぬ臭覚世界の情報に夢中になつて居
るのだ。「馬肥やし」は江戸時代に渡来した牧草の野生
化したもので、獣の世界との親和を伺わせるところも
面白い。

有明の湧き水汲んで走りの茶

健二

夜明けに湧き水を汲んで一杯の茶を立てる。それも
新茶であるという、ここでは「*十便十宜」にありそ
うな文人生活のイメージ。この上ない心境が羨ましい

程である。「走りの茶」と収めたところがうまい。

ひなげしや今もそのまま子供部屋

多美子

「ひなげし」が可憐な女兒の印象で、不在になった部屋がそのまま残されている。事実はともかく、句の深さを求めるなら亡くなった女の児と考えたい。帰って来る日が待たれるのである。

モノクロのイタリヤ映画雲の峯

紀子

白黒のイタリヤ映画と言えば、終戦後、高校時代に見た衝撃のイタリヤ・レアリズムをいくつか思い出す。僕の場合は疎開した田舎町で、雨戸をガラガラと閉めて上映となる芝居小屋のような所だった。「自転車泥棒」「戦火の彼方」、また「苦い米」の「肉体派女優」シルバーナ・マンガーなどと。そういえばいづれにも灼熱の夏空があつたようだ。この下五の「雲の峯」が適確である。

*「十便十宜」とは、清初の戯曲家にして文人李漁の漢詩の連作である。李漁が自分の邸宅伊園での生活ぶりを歌いこんだ連作であり、十便のほうは伊園の暮らしやすさ、十宜のほうは周りの自然の美しさを歌っている。これに基づいて1771年に池大雅が「十便帖」、与謝蕪村が「十宜帖」を描き、合作した画帖が「十便十宜帖」である。大雅作の「釣便」は名高い。国宝。

川端康成が家を買うのをあきらめてこれを蒐集しており、現在は川端康成記念館蔵。志賀直哉は、大正時代に所有者だった松

本森蔵宅でこの実物を見て感動し、『座右宝』(自薦の美術図録。大正15年刊)のひとつに池大雅の「十便帖」を選んでいる(ウィキペディアから転載)。

木下遊船吟行句会(6/17喫茶店カペー) (興正記)

梅雨入りの翌日から晴天続きの6月17日(土)、白金霞恒例の吟行句会が開かれた。場所は印西市木下。同市NPO法人の主催する「ぶらり川めぐり」で、手賀沼に続く3本の川を60分で周遊する。この日の参加者は男5名、女3名の8名。10時40分にJR成田線木下駅に集合。徒歩5分ほどの中央公民館に向かう。遊船はその裏手から出ているのだ。そこは川の中州のような場所で、橋を渡ると水面に見慣れぬ植物が生えており、誰もその名を知らない。俳人にも知らない事はあるのである。反対側には菱が浮いており、花らしきものも。「根のことは思はず菱の花を見る」(幸之助)裏手に回ると、あるある発着場が。ボランティアらしきおじさんが3人で関所を設けている。各々千円也の乗船料を払い、待つこと5、6分、周遊を終えた舟が戻ってきた。船頭含む13人乗りの小さな舟である。一同が乗り込むと、ガイドの水路案内が始まる。舟は狭い弁天川を進む。この川は手賀沼の掘割で、両脇には民家や製糸工場跡、神社など見える。「水漬く枝そこも

庭なり額の花」(みち)「朽ち舟にとんぼう群るるひとと
ころ」(紀子)川はやがて六軒川と合流して手賀川とな
り、川幅も倍以上の広さに。兩岸の景色も一変し、青
葦や真菰の群生が続く。「あじさのみや川幾筋も舟行す」
(健二)「うち靡き水漬くもありし真菰かな」(幸二)「青
葦や新田拓く夢の跡」(健二)饒舌なガイドの説明に辟
易しながら、一行は句材探しに必死である。何しろ下
船時に5句を提出しなければならぬ。川幅が広がる
と川風も強くなってくる。水しぶきもかかり、寒いく
らいになってきた。あの曲がり角の先に瘤白鳥の群れ
がいますよ、とガイドの説明。見えた。離れた先に白
鳥の大群が白磁の欠片をばら撒いたように。「舷やしぶ
きが頬に青あらし」(幸二)「陶片のごとくに鳥や大南
風」(興正)「瘤白鳥一羽離るる雲の峰」(紀子)白鳥は
手賀沼の留鳥で、結構繁殖しているようだ。群れが近
づきアップになり、やがて遠ざかる。川岸にパラソル
を差した釣り人が点在する。杭に川鶉が止まっている。
蝶々も遊びにきたようだ。「遊船の行く手をよぎる川鶉
かな」(宏之助)「肩に寄る夏蝶よけて舟のゆれ」(多美
子)「長々とガイドの話行々子」(高志)舟がUターン
して帰路に着く。右手の葦原から葭切の音が。どこど
こ? ガイドの声が五月蠅くて聞こえない人も。高志
さんがたまりかねてガイドを制する。手賀川から合流

点を経て、六軒川に入る。川幅は弁天川より広い。ち
ようど60分の行程をへて、発着場へ戻ってきた。下船
して、公民館に向かう途中、生垣に登る青大将を高志
さんが認め、大声をあげて地面に転ぶ。蛇が苦手だそ
うだ。それを見た幸一さんが早速、句材に。「蛇を見て
仆れし人と手掴む人」(幸二)。

光成高志

川開く如く青葦白鳥と
黒揚羽羽を猛振川上る
紫陽花が川の岬に群れ咲けり
長々とガイドの話行々子
吾が体すつ飛ぶ青大将の前

松村幸一

万緑が釣草に映え成田線
うち靡き水漬くもありし真菰かな
蛇を見て仆れし人と手掴む人
みな舟に耳を傾けほととぎす
舷やしぶきが頬に青あらし

吉羽多美子

身の内をぬける川風鬼やんま
頬にくる初夏の風川下り
夏の雲川鶉飛びこむ水しぶき
肩に寄る夏蝶よけて舟のゆれ

雲の峯あち見こち見の川鶉かな

倉田紀子

瘤白鳥一羽離るる雲の峯

橋渡り牧水歌碑や夏木立

朽ち舟にとんぼう群るるひとところ

舷の水面に映る夏帽子

船頭の講釈聞けり行々子

光みち

小粒なる枇杷熟れてゐる水の郷

川鶉飛ぶ進む舳先を横切れり

青芦に鉄塔の足隠れたり

水漬く枝そこも庭なり額の花

梅雨晴間川の真中を舟行けり

磯目健二

波しぶき舳の近くを川鶉飛ぶ

手賀沼の最果ての川船遊び

秋来ても渡らぬ白鳥群れゐたり

青葦や新田拓く夢の跡

あぢさゐや川幾筋も舟行す

佐藤宏之助

鳥肌の立つほど涼し遊び舟

根のことは思はず菱の花を見る

土手草を蛇長々とよぎりたり

遊舟の行く手をよぎる川鶉かな
利根川をよぎれり蛇の蛇行して

仲本興正

黒南風のロータリーにして誰も居ず

木下とふ駅の名たのし梅雨晴間

バラソルに隠れて釣師声出さず

陶片のごとくに鳥や大南風

鉄塔を借景として船遊び

受贈誌（H 29年 6月号）

青炎天縄文の土鮮しき（彩135号）

梅雨夕べ湖北つぶやく波の音（〃）

舟遊び逆白波はオフロード（〃）

余花の雨棚田守れる農七戸（東京ク6月）

老鶯の銜す磨崖観世音（〃） 万世遊 璃子

畑打ちの昨日と違ふ土の色（あすか6月） 山尾かづひろ

山尾かづひろ吟行ノート（H 29・6・15）

五月雨や雷神風神吊提灯 飯田孝三

五月雨や花弁深く蟻宿る 光みち

五月雨の雨垂れ越しに見し故郷 光成高志

金棒を放り赤鬼涅槃哭く（彩135号）

土筆置く皿はみどりの粉まみれ（〃）

賢治童話には風が次に来るべきものの予兆として頻りに登場する。たとえば「注文の多い料理店」の冒頭。

「風がどうと吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はカサカサ木はごとんごとんとなりました」のあとにレストランの建物が突然現れて腹のすいた二人の紳士を誘惑する。次は部屋の中だ。「風がどうつと室の中にはいつてきました」たまりかねて二人は奥へ進む。次々に出される注文は巧妙に二人を死の淵に運んでいく。最後にふたたび前と同じように「どうと風が吹いてきて、草はざわざわ、木の葉はカサカサ木はごとんごとんと鳴りました」となって山猫は消え失せる。風がうしろに待ち構えているものを告げ知らせているのだが登場人物たちは気づかない。結果は悲劇に終ってしまう。

一番痛ましいのは「ひかりの素足」の場合だろう。

一郎と檜夫の兄弟は翌日の学校のために山の小屋から峠を越えて家にもどらなければならぬ。予兆はその朝に顔を出す。青空にくっきりと見えていたはずの山の頂に「パット煙か、霧のようなしろいぼんやりしたものがあらわれ、しばらくしてフイーとするどい笛のような声が聞こえて」きて檜夫を脅かす。檜夫は恐れから泣き出し風の又三郎が告げたという不思議なこと

ばを明かすけれど一郎は風の又三郎はなにかにつけ人をだますやつだからこわがることはないと言いつける。しかし間もなく予言はすべての中として檜夫は吹雪の中で死んでしまう。「風の又三郎」は時によって死神でもあったのだ。「水仙月の四月」の雪ばんこ同様雪の季節ともなればフイーと一声叫んで空を駆けぬけ人を異界につれこんでいくのである。異界の精霊たちは慈悲と冷酷、吉凶善悪互いに相反する性格を兼ね備えた存在なのだ。一見のどかな田園風景の物語に見えるあの「風の又三郎」にしてもその物語のはじめと終わりには狂暴とも思える風のうたにかこまれていてではないか。不思議な赤毛の少年の出現と決別の場面でも予兆としての風はふきあれている。悲鳴のような又三郎の予兆の声が檜夫にだけ聞こえたように一郎が夢の中で思い出したという風の又三郎から先ごろきいたばかりのうたとは風の又三郎の別れの予告であり、惜別の歌だった。

お便り広場（到着順、敬称略）

寝たきりの母に一枝山桜

這ひ廻る吾子の瞳や新樹光

凍てし夜の犬の遠吠へ愛しくて

小学校の同級生の植田輝子さんからまた電話があった。一月以来である。その時送った本誌の録音CDが

届いたので今晚から聴くという知らせだ。何故って彼女は盲人で目では読めないので市の社会福祉協議会の方で読んで録音してCDに刻んで届けてくれるそうだとすべて無料である。ついでに聞いたのが冒頭の三句である。他に世間話をしたがここでは省略する。声が大きく骨密度・血液は二〇代の若さであると自慢されたのが合点がいく元気が伝わって来た。(6.8 電話)

先日は突然の欠席申し訳ありませんでした。二十二日(月)午前にかテーテル検査をして、その結果によつて事後の方法を決める事になりました。葉書で失礼ですが、左記五句仲間に入りさせて頂ければ幸いです。(中略) (ステントをいれて十年です。どんな様子やら?)

(5.22 昭七)

謹啓しばらく失礼をしています。体調如何ですか? 白金葎4月号受け取りながら失礼しています。最近は何かと忙しくして返礼を逸してしまいました。おくれながら私の現況を記してお礼とします。若葉の季節で山裾にある屋敷なので落葉など片付けが大変なんだ。まあ私の生きている間だけだ。今はあちこちに休耕田がある中水を張った田んぼもあります。今年も苗代準備をしている。一反ほど植える積りでいます。楽しみか苦しみか分からんが自分の考えるまま気の向くままに生きています。週二回のゴルフ月一回の同好会

の大きな大会など遊ぶことも多くあり、気ままな生活です。28日には公民館主催で神戸へ行くようにしています。6/20には一泊で出雲大社玉造へ行ってきました。もう86歳という年からいえば、あまり遠出は遠慮しとけばよいのに多くの友人に声をかけられ、なかなかことわれずに行くことにしている。体調もまあ変わったこともなく、この年からすれば元気な方かなーと自負しています。今年中に曾孫が二人も生まれるそうです。八人目のひ孫です。私は昔のことはあまり考えないようになっています。今日が良ければそれで良しとする考えです。あまり無理せず ゆっくり暮らして下さい。以上お礼まで。(燕の子顔中口にして親を待つ)

(5.21 健三)

(燕の子顔中口に花の如　とかして瞬間を詠います。高志)

今日みちさんにお電話で釈明しましたが、一句鑑賞が手遅れになって申し訳ない次第。じつはぼくも風邪が残っていて、書けるかどうか自信がなかったから、コピアンでは曖昧にはぐらかしてしまいました。今日書き出したらこんなカタチになったので、とりあえずお送りします。手遅れもいいところですから、後日回しでもせて貰えたらもつけの幸せだし、没になって気にもしません。たかしさんの御都合次第で自由な御裁量にまかせます。以上お詫び旁一筆しました。

(5.25 幸二)

拝啓 先ずは過日頂いたお便りの御礼とお返事遅れのおわびを申し上げます。早々と夏のような暑い日があると思えば間もなく梅雨兆すという予報で諸事万端おかしな世の中になりました。白金葎に多大の肩入れをなさっていらつしやつた小山陽也さんのご病氣発症残念でなりません。同じ病氣でリハビリ、外を歩いていらつしやる方が沢山いらつしやいます。たとえ、ご不自由があろうとも又、句の仲間にお戻りになる日をお待ちするより致し方ありません。医療は元よりご本人の元気になりたいと云う意欲こそが一番大切かと思えます。五十年を越すご交友の光成さんが励まされることが小山さんの為になるのではと思えますが、こういった事にはご病人の考えに個人差が多く難しいとは存じます。山尾さんにもお話いたしました。東京クラブには毎月「古代」を頂いておりました。会の発足した頃、深大寺の吟行にご参加頂いたこと、山尾氏ご尊父の葬儀の帰りにカフェで休憩したこと、梅の花のおよばれお元氣な姿ばかりが思い出しております。仰せのとおり、我々にもいつ起こるか解らない病氣とか事故とか予知も予防もできません。言える事は健康に心がけると云うことゝ思います。基本的に入院の方のお見舞いは療養のさまたげとか、ご本人ご家族の心遣い

を思い、したくない方ですが、山尾さんにお見舞いに伺うなら、お供したいと申し入れてあります。郵便などご自宅にお出しご家族がお届け下さるものやら、ご迷惑か、又陽也さんが読んで下さるものやらもご考えて静観状態でございます。光成さんご自身も子供のような白金葎のためにあまりにご無理はなさいませんよう心より願っております。もとく貧弱な詩囊年と共にますます衰えロクな句も出来ませんが、まだ生きそうなので今しばらく句友の隅に居させて頂きたくよろしくお願い申し上げます。六月十日(土)が東京クラブの例会で兼題は余花です。見廻すところ余花はななく机上作句に苦しみそうです。光みち様との二人三脚ますます頑張つて頂きとうございます。ごきげんよう。

六月五日

長屋璃子

光成高志様

P. S. 小山さんのことしつこく伺つて詳しくお聞かせ下さいましてありがとうございました。みち様もお見舞いご苦労様でいらつしやいましたね。

冠省 御清吟のことと存じます。先月号楽しく拝読いたしました。小生、お蔭さまで、先週からリハビリに入りました。今月も月例・吟行ともに加われず誠に残念ですが、七月からはきつと出られると思います。月例の出句を別紙のとおりお届け致します。毎々お手

数ですが、何卒よろしくお願い申し上げます。御盛会をお祈り致します。皆様によりしくお伝え下さい。草々

(6.13 孝三)

我孫子日記

5/19	例会
5/20	
* 佐倉ユウカリが丘	
5/24	SOA
5/27	上松へ
5/28	
*2 赤松自然休養林	
5/31	SOA
6/3	一步亭
6/4	
*3 ひよつとこ踊	
6/7	SOA/木下
6/13	
*4 築地	
6/14	SOA
6/16	例会
6/17	川船吟行会

*青谷津田里山映し雲映し

高志

*2 老鶯に口笛吹いて応へたり

みち

翁草呆けて風の吹き抜ける

高志

木曾谷の一枚毎の植田かな

みち

柳絮舞ふ森林浴開会式

みち

春蟬の長鳴き檜資料館

みち

*3 両面や後ろ面が辞儀をする

みち

*4 場内市場黒鯛を開ければ直ぐ売れる

みち

黒鯛買うて帰りの電車眠りをり

みち

編集後記

毎月の兼題を決める時、その季語を想像するのが結構楽しい。作り易さを当初考慮していたが、最近はむ

しろ新しい季語にチャレンジしようと思ったりする。決して強制ではありませんが、十周年で兼題句を選びますので作ってみて下さい。私は不器用なので、復習を兼ねて季語に対面しております。鑑賞文の冗長の所はカットすることにしました。袋綴じ冊子は4頁の倍数の頁数になるので、この点工夫が必要ですので。以上は編集上の後記です。

ひろし先生が付度のことの後記を書かれておられる。鑑賞は付度そのもの、17音に表現された俳句からいかに推察する能力があるか、知識と体験を動員した総合力が試される云々。俳句は書かれていないところを想像して作者の心持を掴む。これが俳句の俳句たる所以なのだ。一番いいことは書かないでおく。俳句は無論、文芸の宿命です。これが私には面白いと思えるようになりました。

白金霞6月号(通巻第七六号)平成二九年六月二〇日発行

編集・発行人 光成高志

発行所 二七〇・一一一九 我孫子市南新木二二四・一七

☎・fax 〇四一七八七一一〇六八

表紙の題字・加納綾女 同写真は六月一九日の白金霞